



教育ルネサンス
食育推進プロジェクト



毎月19日は食育の日

生産・消費者 相互理解を



食文化の原点を継承 安河内氏

藤討論の締めく

安河内 旬の問題は食育と深くかかわっている。JAグループ福岡は「元気で豊かな地域づくり」に貢献する中で、食育推進の取り組みとして消費者と生産者双方の顔が見える関係の再構築を進めている。

具体的な取り組みとして「見る・学ぶ・働き・喜び」を提案している。「見る」は旬の食材や生まれ育った地域の文化を見

【主催】読売新聞西部本社
【後援】内閣府、文部科学省
済産業省、福岡県、
県学校給食会、NHK
JAケループ福岡

教育ルネサンス 食育リレー講座

日本の食卓—旬を考える

教育ルネサンス・食育リレー講座「日本の食育
—旬を考える」が5月13日、福岡市の読売新聞
西部本社で開かれ、約140人が受講した。猪口
邦子・前内閣府特命担当大臣（食育担当）が「世
界の食育・日本の食育」と題して講演。福岡県農
業協同組合中央会専務理事、安河内毅氏、料理研
究家の徳永睦子氏、猪口氏がパネル討議し、「生
産者と消費者が理解を深める」とが食料自給率の
向上や地産地消、食文化や伝統の継承につながる
などと話した。この講座は読売新聞が提唱してい
る食育推進プロジェクトの一環で、「生きる力と
しての食」を考えるため毎月一回開催している。

工藤 四季折々の野菜や果実によって季節を感じる機会が少なくなっています。

安河内 その原因は田が農家の経営力向上をめざして1960年代に農業政策を転換し、「多品目少量生産」をやめて「多品目大量生産」を進めたことだ。生産者は品種改良と多様な作型（栽培のやり方）をつくり出すことによって国の政策に対応してきた。消費者も好きな食材を好きな時期に食べることを歓迎した。旬の食材を生かした手づくり料理を楽しむ習慣は減り、外食も多くなった。その結果、食文化の伝承も難しくなっている。

徳永 旬には、季節の味覚を楽しむこと以外にも食材を通して、学んだり心を育むといった大切な意味がある。もぎたての新地品は鮮度がよく、栄養価が高い。地域の文化や自然の恵みに感謝する心も養う。季節を五感で感じたり、その地域にしかない文化を知ることでもある。

域社会などさまざまな課題を投げかけていく。

そのためには、幼いころからほんものの味を経験させることが大切だ。地産地消、それも露地产品なら伝統的な家庭料理を楽しむ」となる。旬には、體かな人間性や思考や行動パターンを決める要素がいっぱい含まれ

醍醐味を伝える努力

ている」とを再認識すべきだ。

民俗学の宮本常一先生が「文化は足元から生まれる」とおっしゃっていますが、食は極めて身近で、人間とのかかわりが非常に深いものです。その意味で「食は文化」といつていいのではないか。そのなかでも、地域の伝統食はその地域だけでなく、日本の財産だと思います。

よみうり食育
ナビゲーター
(女優、食と農研究家)
浜 美枝氏

■主催者あいさつ■

流芳新聞西部本社編集委員 小川 夏人

最近、体調を崩したので生活習慣を見直し、玄米食にチャレンジしています。約2か月たちましたが、体に良いことが実感として分かってきました。何より圧力釜で炊く玄米はおいしく、余分なおかずがいらなくなりました。改めて「食の大切さ」を痛感しています。玄米食のきっかけは、福岡市内の高取保育園の取り組みを取り組みを取材したことでした。ここは給食に玄米や無農薬野菜、地元で取れた魚を毎日、使ってています。玄米和食の調理法を工夫して保護者にも発信し、子どもの心身の健康づくりに成果を上げています。今回お招きした講師は、食育推進のエキスパートで、その幅広い見識と優れた経験に基づくお話を、皆さんに食生活改善や食育推進の役に立つものと思います。

衆議院議員 猪口 邦子氏

■ 特別講演 「世界の食育・日本の食育」

食育基本法が施行され、小泉内閣の食育推進担当大臣として啓発事業や基本計画の策定にかかわった。健康で豊かな人間性を育むために家庭や学校で食育を推進し、それを支える農林水産業をより活性化させるため生産者と消費者の交流を促したり、伝統的食文化の継承など

知識を持つた人が匂の醍醐味を伝える努力をしなくてはならないだろう。経験を伝える努力は楽しいものだ。体験してこそ匂のすばらしさが伝えられる。

工藤 日本の食料自給率は先進国の中で最低だ。食の安全保障という観点から、どう考えたらいいのか。

猪口 アジア、アフリカなど開発途上国を中心に今後大幅な人口増が見込まれ、世界の食料需給は中長期的にみてかなり逼迫する。日本への影響は大きい。食料自給率を高めるには、フランスのように農業に強くなる国づくりが基本だ。「食の安全保障」については「工夫しながら、対策を見いだす」とが出発点。「地産地消」を基本に、収益性を高める攻めの農政も必要だ。そのためには農業重視について国民的合意を得ることが大切だ。

「孤食」「欠食」止める

「めること。」学ぶは食材に関する栄養知識や安全性を知るスがとれた地域づくりを大切にし物であり命を育む」と理解するための農業体験。そして「喜び」は収穫の喜びを自ら体験、家族が食卓を囲み、喜びを共有する環境を整えることだ。

福岡県内38か所の「JA農産物直売所」では旬が楽しめる露地栽培品を販売している。農業の持つ多面的機能を理解し、都市近郊に農業が成り立つ環境を考えてほしい。食と農のバランスがとれた地域づくりをするために。旬が分かる子供が育てるためにも。

徳永 本物の味や食を理解する消費者の育成が重要だ。人間の味覚は10歳くらいまでにできるが、だから本物の味が分かるような味覚教育が大切。そのためにも料理教室を地域に創設し、旬や本当の味覚が分かるような友だちの輪を広げていくことが重要と思う。

現在抱えている問題は、食生活の著しい変化だ。外食や、独りで食事をとる「孤食」が増えている。食事を抜く「欠食」や栄養の偏りも心配だ。

「肥満」や「生活習慣病」などの不安もあり、健全な食生活を再構築しなければならない。

その際、母親の責任ばかり違うのではなく男女共同参画の視点が重要だ。

世界的にも食育への関心が高まり、新しい動きも出ている。イタリアで始まったスローフードもそのひとつ。米国では人と地球が共存共榮できる持続可能なライフスタイル「LOHAS」(ロハス)も提唱されている。

古いものと新しいものや人ととのつながりを意識した生活行動をもつと大事にすべきだ。

2007年6月19日
読売新聞17面